

(才) 集計方法

質問1は、記号A～E（表2-15）による概数回答を可としたため、集計の際には、実数と4名以下の回答は実数集計、記号回答は表2-15に示す中央値等を「実数換算値」と定め集計した。

		人數×を記入して下さい				○をつけて下さい												
		活用対象者		使用主体者		結果の活用方法												
MSFASの実施目的	専 門 教 育 機 構	教 育 机 构	高 等 教 育 机 构	学 校 机 构	企 业 机 构	公 共 机 构	其 他 机 构	个 人	个 人 机 构									
	(ワイスコンシン・カード・ソーティング・リスト) の実施																	
	器具収集																	
	対象者の認識の把握																	
	支援方法の検討																	
職員(スタッフ) 訓導のためのツール																		
休憩等の支援の実施																		
メモリーノートの実施																		
M I W 実 施 ク サ ン プ ル	講 義 指 導 の 方 法	講義指導での利用のため																
		作業能力の把握のため																
		課題認定として使用するため																
		支援方法の検討のため																
		その他																
M I W I ク サ ン プ ル	課 題 実 施 の 監 査	課業相談・評価																
		ワークトレーニングコース																
		ジョブコーチ																
		自立支援コース																
		実施した課題																
M I W I ク サ ン プ ル	事 務 課 題	数値チェック																
		物品請求書作成																
		合意日新要証																
		ラベル作成																
		OA課題	数値入力															
M I W I ク サ ン プ ル	実 務 課 題	文書入力																
		コピー＆ペースト																
		ファイル整理																
		検索修正																
		実務課題																
M I W I ク サ ン プ ル	ナフキン折り																	
		ピッキング																
		搬送計画																
		プラグタップ																
		実務課題																
※ 人数が多くて把握しがたい場合には、以下のような基準を記号で記入して下さいません。 名以下→実数、 5-9名→A、 10-14名→B、 15-19名→C、 20-24名→D、 25名以上→E																		
2. 上記以外でトータルパッケージの使い方がありましたら、具体的にどのような使い方をしたのか(実施主体者や使い方)を教えてください。																		
3. トータルパッケージについて、今後、何らかの活用予定がありましたら教えてください。																		

図2-4-4 調査に使用した質問紙

表 2-15 質問 1 に関する集計方法

記号	人数（名）	実数換算値（名）
A	5～9	7
B	10～14	12
C	15～19	17
D	20～24	22
E	25 以上	25

(カ) 結果

①質問 1

質問 1 では、トータルパッケージを配布後 2004 年 9 月末までの累積実施人数について、「活用対象者：障害別」「使用主体者」「結果の活用方法」の内訳の実数または概数を回答してもらった。その結果を (a)～(d) に示す。

(a) WCST

図 2-4-5 によれば、WCST では、結果の活用方法として、「職リハ計画の参考にする」「事業の支援実施の見通しを立てる」「相談の中で障害受容を促す」「補完手段の検討」の順に回答数が多く、またカウンセラーによる実施が多かった。

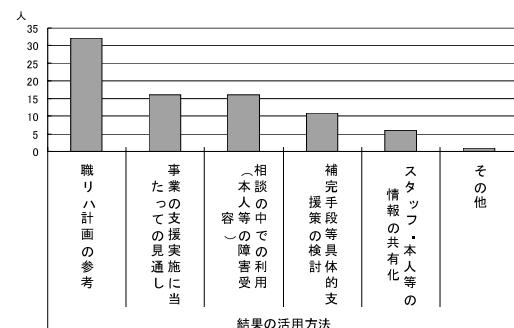


図 2-4-5 WCST の結果活用方法

(b) MSFAS

図 2-4-6 によれば、MSFAS は「情報収集や対象者の課題の把握をする」ための実施数が多く、中でも精神障害に対する実施数は非常に多かった。

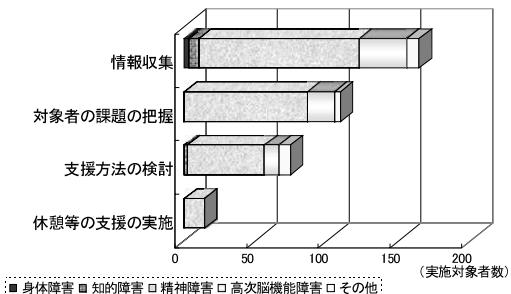


図 2-4-6 MSFAS の実施目的

(c) M-メモリーノート

図2-47によれば、M-メモリーノートは、「補完手段の検討を行うため」「相談の中で障害受容を促す」「職リハ計画の参考とする」の順に活用される数が多かった。

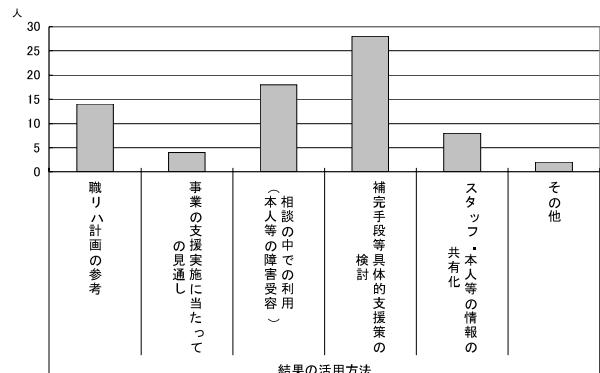


図2-47 M-メモリーノートの活用状況

(d) 幕張ワークサンプル (MWS)

MWS（図2-48）は「ワークトレーニングコース」次いで「職業相談・評価」の場面での実施数が多く、特にワークトレーニングコースでの知的障害への適用が目立った。また、MWSの活用状況（図2-49）によれば、「職リハ計画の参考」とする、あるいは「事業の支援実施にあたっての見通し」を立てるために、特に「実務課題」を多くの対象者に実施していた。

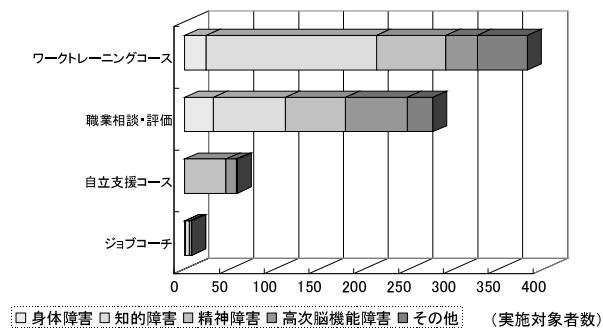


図2-48 MWSの実施場面別の実施対象者数

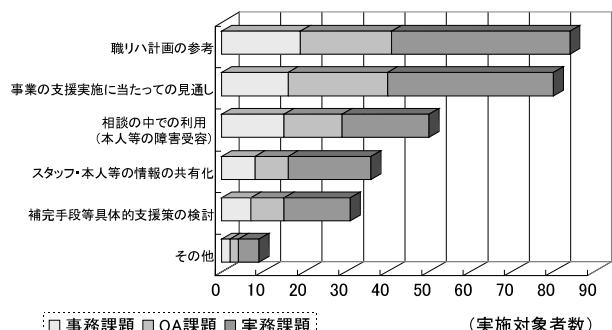


図2-49 MWSの活用状況

事務課題（図2-50）は4課題全体で精神障害と高次脳機能障害を対象に実施される数が多かった。また、「数値チェック」が全ての障害種に、「物品請求書作成」と「作業日報集計」は、精神障害と高次脳機能障害に実施されている数が多かった。

OA課題（図2-51）は、5課題全体で高次脳機能障害と精神障害を対象に実施される数が多かった。また、「数値入力」「文書入力」が全ての障害種に対して広く実施されていた。

実務課題（図2-52）は、事務課題・OA課題に比して実施対象者数が多く、特に「ピッキング」は500名を超えていた。障害種別を見ても知的障害を対象に実施される数が多くなっていた。

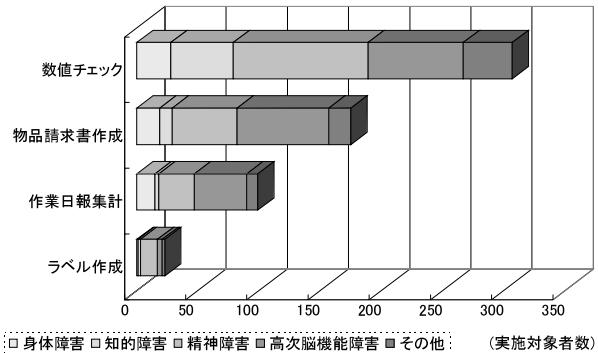


図 2－50 MWS 事務課題 実施状況

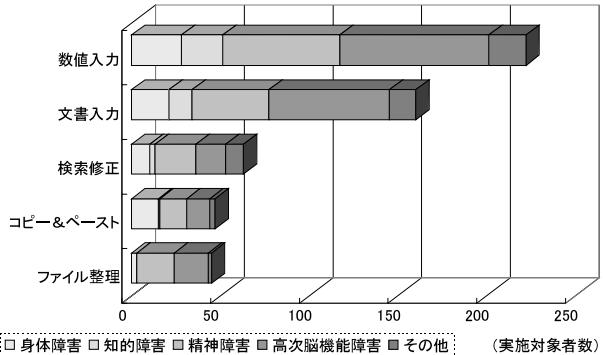


図 2－51 MWS OA 課題 実施状況

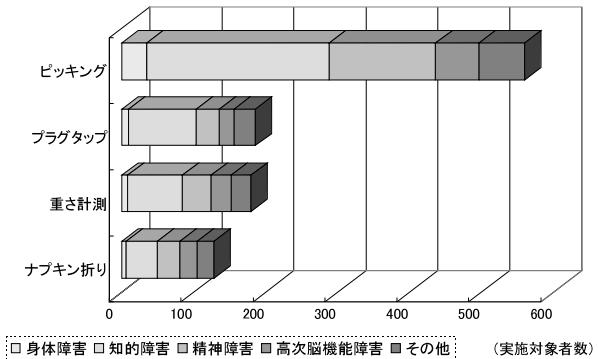


図 2－52 MWS 実務課題 実施状況

②質問 2：独自の使い方

以下の (a) ~ (g) の回答が得られた。

- (a) メモリアシストと MWS を連携させて実施する。
- (b) 物品請求書作成に電話応対を組み合わせる。
- (c) 高次脳機能障害者の評価で、WAIS-R と浜松式、トータルパッケージを併用している。
- (d) 課題で活用した補完手段を写真により蓄積し、様々な支援者が活用している。
- (e) MSFAS のストレスに関するシートを日誌として記入してもらい、定期的に行う適応指導の情報源ならびに相談時の資料としている。
- (f) MSFAS を元に「就職希望シート」を対象者と相談しながら作成している。
- (g) ジョブコーチの事前評価・支援で「障害特性の把握」「ラポール形成」「対象者にとってのジョブコーチの役割の体験的な理解」を目的に行ってている。

③質問3：今後の活用予定

- 以下の回答が得られた。
- 相談・評価での活用に加え、準備支援事業の訓練科目として取り入れる。
 - MSFASを支援講座の教材として活用する。

(キ) まとめ

トータルパッケージのツールを配布した当時の研究テーマだった「高次脳機能障害者・精神障害者」の支援での活用のみならず、身体障害・知的障害・発達障害・その他の障害者に幅広く活用されていてこと、相談や訓練などの様々な場面でカウンセラーや指導員等の様々な担当者によりツールが活用されていたことが明らかとなった。特に、MWSの実務課題は知的障害者への活用事例が多く、「ピッキング」に至っては、活用された延べ数・内訳ともに知的障害者が圧倒的に多かったことが特徴であった。

また、応用的な使い方としても、トータルパッケージのツールを各事業の「教材」として組み込んで活用している事例も報告されており、より多様な使い方が工夫されていることがわかった。

(2) MWS ホームワーク版の活用事例

地域障害者職業センターには、①センター内の作業支援、②職業準備講習カリキュラム、③精神障害者自立支援カリキュラム、の3つを柔軟に組み合わせる等をして行う「職業準備支援」というメニューがある。①では、働く上での課題の把握・改善したり、基礎的な労働習慣（基本的な体力、作業の持続力、作業態度等）を身につけるための支援が行われる。②では、職業講話や事業所見学、事業所での作業体験等を通じて、職業に関する知識を習得するための支援が行われている。③では、対人技能訓練（SST）やグループミーティング、簡易作業体験等を通じて、社会生活技能等の向上を目指し、精神に障害がある方を対象に支援が行われている。

また、他のメニューとして、うつ病等精神障害により休職中の方に対し「リワーク事業」を実施している。具体的には、職場復帰のために必要なウォーミングアップなどの支援や、必要に応じて復帰先事業所でのリハビリ出勤、精神障害のある従業員の復職を考えている事業主に対して、主治医等と連携した職場復帰に向けた支援を行っている。

ここでは、MWS ホームワーク版（以下「ホームワーク版」という）の活用事例として、X障害者職業センターでの「自立支援コース」での事例と、Y障害者職業センターの「職業準備支援」「リワーク事業」での事例を紹介する。

(ア) Xセンターの事例から

X障害者職業センター（以下、Xセンターという）で、ホームワーク版の課題のうち「食器洗い」「家計簿作成」を実施した4-Aさんの事例について以下に示す。

①対象者 4－Aさんの概要

(a) 年齢、性別：29歳、女性

(b) 障害状況

4－Aさんは、短大在学中の19歳当時にバイク事故で頭部外傷（前頭葉、側頭葉）を受け、入院・加療した。現在、精神障害者保健福祉手帳2級を取得している。

地域センターの利用を開始した当時の聞き取りから、4－Aさんには、交わした約束の取り違えや事実関係を混乱する、といった記憶障害の状況が認められた。また、精神的緊張が強く、記憶障害とも重なっての被害妄想的な訴えがあり、感情抑制の問題があると推察された。また、地域センターでの訓練の様子等から「遂行機能障害」の障害があると推察された。

(c) 障害認識

退院に際して、病院から頭部外傷の後遺症の有無についての指摘は無かった。退院後に短大に復学したもの、記憶障害や感情抑制等に関連すると思われる問題が見られ、学業面・対人面のトラブルが生じたため短大を退学した。

その後、4－Aさんは在宅生活を送ったのち、ボランティアや脳外傷の家族会への参加をするようになった。その間に、新聞記事で高次脳機能障害のことを知ったことや、26歳から29歳にかけてリハビリテーション施設で定期的に作業療法等を受けていたことから、4－Aさんは、自分には「記憶障害」や、「新しい場面や人への適応力が低い」「暗黙のルールを推察しにくい」等の高次脳機能障害があることを認識するようになってきていた。

(d) 相談・評価の結果について

5月にXセンターに来所し、相談・評価を実施した。その後、6月からは、ワークトレーニング社に短期間通所してもらい、継続的に評価を行った。これらの結果から、次の5点が明らかとなった。

- ①同時並行で作業を進められない
- ②一つ一つがマイペースで作業スピードは上がりにくい
- ③暗黙の了解やルールが通じにくく、指示がなければじっとしているため、自発性がない印象を与えててしまう
- ④メモ帳に書きとめる習慣はついているが、複数冊持ち、どこに何を書いているのか把握できていないため参照ができず、メモ帳の活用に至っていない
- ⑤疲労感を持ちやすい。

その他、4－Aさんは楽しそうに明るく振る舞っていても、実は疲労感をため込んでいることもあり、家で情緒不安定になることが確認された。

②支援目標

記憶障害の補完手段としてM-メモリーノートを適切に活用できるようになるための、確実な支援を行うこととした。そのためには、在宅している段階で集中訓練と般化訓練までを行い、M-メモリーノ

ートの使用が安定してから、「自立支援コース」を受講し、徐々に就労場面に慣れていくことを目標とした。

③支援経過

4-AさんへのM-メモリーノート訓練開始以降の支援経過を表2-16に示す。3ヶ月目からM-メモリーノートの支援を開始した。その後、6ヶ月目から「自立支援コース」の受講を開始し、コースの受講と平行してホームワーク版の「食器洗い」と「家計簿作成」を行った。

表2-16 4-Aさんの支援経過

	1ヶ月目	2ヶ月目	3ヶ月目	4ヶ月目	5ヶ月目	6ヶ月目	7ヶ月目	8ヶ月目	9ヶ月目	10ヶ月目
支援内容	相談・評価	M-メモリーノート支援 ・集中訓練（3ヶ月目） ・般化訓練（4,5ヶ月目）		自立支援コースの受講 ・「食器洗い」7ヶ月目～9ヶ月目 ・「家計簿作成」翌年10ヶ月目～継続						

④支援結果

(a) M-メモリーノート集中訓練

【方法】

Xセンターで集中訓練を行った後、次の①～⑤の方法で日常生活における般化訓練を実施することとした。

- ①Xセンターから4-Aさん宅へ課題指示書をFAXする。
- ②4-Aさんは指示内容をM-メモリーノートに転記する。
- ③4-Aさんは単独で課題を実施する。
- ④4-AさんはFAXでXセンターに課題を提出する。
- ⑤来所時に、M-メモリーノートの活用状況の確認と使い方の修正を行う。

【結果】

集中訓練は3ヶ月目に3日間に渡り行った。その結果を図2-53、表2-17に示す。4-Aさん自身が自分に記憶障害があることをよく認識しており、補完方法の必要性を感じていたため、M-メモリーノートの導入に関しては積極的であり、集中訓練はスムーズに行えた。

日常生活における般化訓練は4～5ヶ月目に計6回行った。2回目の般化訓練から、課題として「脳を鍛えるドリル」を用いた。課題を導入する前は家でできることができなかったため、M-メモリーノートに記載する内容も乏しく、参照行動も定着しなかった。ところが、課題を導入することにより、徐々にM-メモリーノートの活用ができるようになり、期限内の課題提出は遵守できた。

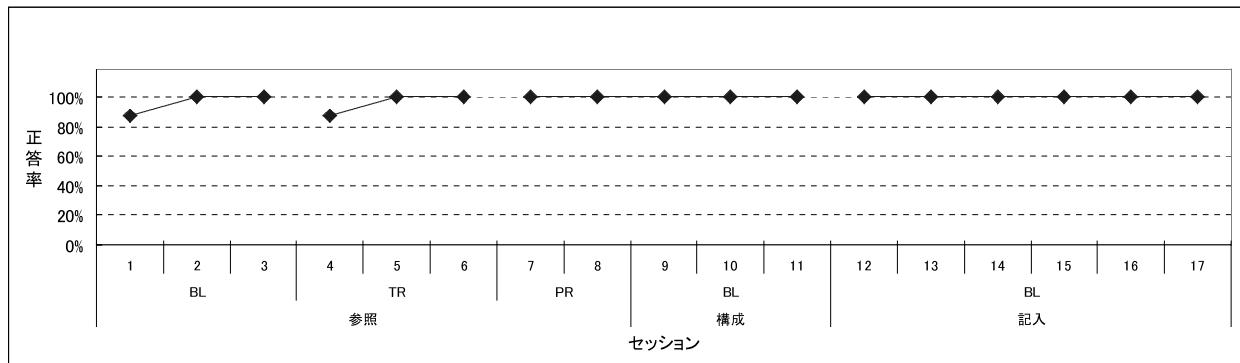


図2-53 4-AさんのM-メモリーノート集中訓練の結果

表2-17 4-Aさんの参照・構成・記入におけるブロック数と平均正答率

	参照			構成			記入		
	BL	TR *	PR	BL	TR	PR	BL	TR	PR
セッション数	3	3	2	3	—	—	6	—	—
平均正答率	96	96	100	100	—	—	100	—	—

備考) * : 付加的指導として、各項目の弁別のためのキーワードを説明し、1 試行毎に結果をフィードバックした。

(b) 自立支援コースでの課題実施

M-メモリーノートの活用が概ね可能となったため、6ヶ月目～10ヶ月目まで自立支援コースを受講することになった。また、同時期にホームワーク版の活用を開始した。

【実務課題「食器洗い」：7ヶ月目～9ヶ月目】

＜選択理由＞ ホームワーク版の中で最初に取り組む課題であり、対象者にとって馴染みやすいこと、家族から「家庭でもやってもらえると助かる」と意見が出されたため、「食器洗い」を選択した。

＜方法＞ 経験のある作業だったため、通常設定されているレベルごとの試行は行わず、毎日夕方と就寝前（1日2回）にたまっている食器を洗うこととした。その都度、チェックシートに洗った食器の種類、出来映えを記入し、保護者にチェックしてもらった（図2-54）。

＜結果＞ 每日2回の食器洗いは忘れずに行えた。チェックシート記入も可能だった。しかし、感想を書くことが苦手で、「何を書けばいいのかよく分からない」と述べることが多かった。また、1ヶ月を過ぎた頃から、「いつまでやるの？」との質問が多くなり、飽きてきた様子が見られた。さらに、保護者の協力体制は十分だったとは言えず、毎日保護者がチェックする体制がとれなかつたことから、対象者が保護者を責めてしまい、けんかになることもあった。

＜現状＞家の手伝いとして毎日行っている。